

【実践報告】

大学全体で支える国際教育プログラムを目指して

海外臨床実習の準備教育の取り組みから

今福 輪太郎, 早川 佳穂, 西城 卓也
岐阜大学医学教育開発研究センター

要旨

医学生は、5～6年次にかけて実施される選択臨床実習で学外施設での臨床教育を受けることができる。毎年10～25名の医学生が海外の病院で実習を希望するため、医学教育開発研究センターは、渡航の約1年半前から英語での問診や身体診察、症例発表などを学ぶ準備教育プログラムを提供している。準備教育では、ロールプレイといった英語コミュニケーションの練習機会を増やすことが重要であり、外国人の模擬患者の存在が必要不可欠となる。当プログラムは、医学部をはじめ工学部、応用生物科学部などの留学生から協力を得て、英語での医師-患者コミュニケーションの練習を行ってきた。本稿はその教育実践を報告するとともに、英語力の向上に加えて多文化理解を促すような教育内容の充実化にむけて大学全体で支える国際教育プログラムを提案したい。

キーワード：医療英語，臨床実習，国際交流，医学生，留学生，文化

1. はじめに

昨今、人間の移動や活動が国境をこえて広がり、グローバリゼーション（地球規模化）という言葉をよく耳にする。こうした背景の中で、高等教育ではグローバル人材の養成を重要な課題の一つとして捉え、その概念や教育に関して長く議論してきた（例：広島大学，2015）。卒前医学教育や医師育成の領域においても例外ではなく、多様な文化を受け入れるためのグローバルマインドセットや高い異文化コミュニケーション能力は、獲得すべき必要な能力として認識されつつある。

日本の在留外国人は、平成27年末の統計で223万人を超え、前年末に比べ約11万人も増加（法務省，2016）、また、平成27年の観光等の目的で訪れる外国人は1970万人を超え、前年末に比べ600万人以上も増加している（日本政府観光局，2017）。この状況に比例して、医療現場においても日本人患者だけでなく外国人患者を受け入れる機会が

急増し、経済産業省（2014）は医療者・医療機関向けに「病院のための外国人患者の受入参考書」を発刊するに至った。また、医師は海外の医師や研究者との学術的交流を通して、世界レベルでの医学・医療の発展に寄与することが求められる。新たな知見や技術を日本から発信したり、海外から学んだりするためには、グローバルとローカルの両視点を持つ医療人の養成が必要不可欠である。

岐阜大学医学部医学科では、国際的視野を持ち地域に貢献できる「グローバル」マインドを持つ医師育成の一貫として、5～6年次に実施される「選択臨床実習」の中で国内の教育病院での実習に加えて、希望者には海外の医療機関での病棟実習を最大8週間まで認めている。こうした海外臨床実習の希望者に対して、医学教育開発研究センター（MEDC）では、渡航の約1年半前より準備教育を企画・提供し、学生の海外での学びを支援している。本稿では、その海外実習準備教育プログラムの概要、特に、岐阜大学の留学生に患者役（模擬患者）を演じてもらうロールプレイや交流を通して参加学生にどのような学びがあったのか、また、患者役として参加した留学生が何を感じたのかを中心に報告し、今後の国際教育の在り方について考察する。

2. 海外臨床実習

選択臨床実習は、4～5年次における42週間の大学病院内実習に引き続き、5～6年次の時期に実施される。学生は、4週間を1単位として学内外の医療機関5か所（5単位）を選択し実習に参加する。希望する学生は、20週間の選択臨床実習期間のうち最大8週間（2単位）を海外の医療機関での臨床実習にあてることができる。ただし、海外臨床実習に参加するためには、下記の学内申請条件を満たす必要がある。

- ・TOEFL スコア（ITP 550 点以上、iBT 79 点以上）
- ・準備教育プログラム（課外授業）の8割以上の出席
- ・一定以上の学業成績
- ・英語による客観的臨床能力試験

（English Objective Structured Clinical Examination: OSCE）の受験

平成27～29年度に海外臨床実習の参加学生は、延べ47名（H27年15名、H28年8名、H29年24名）にのぼり、実習先も欧米からアジア、太平洋地域の国々と多様である（表1参照）。

国	機関	延べ人数（年度）
アメリカ	オレゴン健康科学大学	2 (H27, H29)
	カリフォルニア大学サンフランシスコ校	1 (H28)
	ミシガン大学	1 (H28)
	バージニア大学	1 (H29)
	ピッツバーグ大学	1 (H27)
	フロリダ国際大学	1 (H29)
	アルフレッド・デュポン小児病院	2 (H27, H29)
イギリス	プリマス大学	1 (H29)
	リーズ大学	1 (H29)
オーストラリア	シドニー大学	18 (H27, H28, H29)
	モナシュ大学	1 (H28)
オーストリア	ウィーン医科大学	1 (H28)
カナダ	マギル大学	8 (H27, H28, H29)
タイ	チェンマイ大学	4 (H27, H29)
ドイツ	ドイツ赤十字病院（アルツアイ）	1 (H29)
	アウグスブルク病院	1 (H29)
ニュージーランド	オークランド大学	1 (H27)
フランス	パリ第11大学	1 (H27)

表1：医学科海外臨床実習実績（平成27～29年度）

岐阜大学医学部医学科の海外臨床実習では、実習受け入れ先を学生自身で探させることを基本方針としている。これは、海外機関の担当者とのコミュニケーションや申請書類の作成、予防接種、渡航・宿泊手配を含む準備段階から学生の主体性を促すことにより、準備過程からの学びや当事者意識の醸成、実習参加時のモチベーション向上をねらいとしている。実習機関によっては Personal Statement (志願書・志望動機書) や Curriculum Vitae (履歴書)、Letter of Recommendation (推薦状) の提出が求められるため、英語での主張の流れや論旨の明確さ、表現、文法、語彙など、MEDC 教員が個別に対応し、学生の書類作成のサポートを行なっている。また、保険加入、宿泊手配、渡航準備等の事務手続きや海外生活に関わる相談は、MEDC 教務補佐員や医学科学務係が主に担当し、そのサポート体制を整えている。

3. 準備教育プログラム

MEDC は、海外臨床実習の参加に際し必要な英語コミュニケーション能力や医療英語の学習機会を提供するため、準備教育の一環として5年生を対象に「医療英語ワークショップ」を開催している。ワークショップには、医師で医療英語教育に精通する外部講師を招聘し、医学的知識とコミュニケーションの両面から一貫した系統的教育を実践している。H28年度は、オリエンテーションと5回のワークショップ、English OSCEを実施した(表2参照)。

大学全体で支える国際教育プログラムを目指して

	日時	場所	内容
オリエンテーション	H28年4月15日(金) 16時30分～18時00分	岐阜大学医学部 教育福利棟3階講義室	海外臨床実習の意義、申請スケジュール、先輩からの臨床実習報告
医療英語ワークショップ	第1回	岐阜大学医学部 教育福利棟3階講義室	History Taking (I) -Foundations and fundamental techniques
	第2回	岐阜大学医学部 教育福利棟3階講義室	History Taking (II) - Advanced techniques and case presentations
	第3回	岐阜大学 サテライトキャンパス	Case presentation, note writing, and discussion on diagnoses, x-rays & ECGs
	第4回	岐阜大学医学部 教育福利棟4階講義室	Physical Examination (I) - Neurology, musculoskeletal, head & neck
	第5回	岐阜大学医学部 教育福利棟4階講義室	Physical Examination (II) - Heart, lungs & abdomen
実技試験	H29年1月7日(土)	岐阜大学 サテライトキャンパス	English OSCE

表2：海外臨床実習準備教育プログラム（平成28年度）

医療英語ワークショップでの模擬患者

「医療英語ワークショップ」は、問診や身体診察、ケースプレゼンテーションを中心とした学習内容で構成され、各回は短い講義と英語の実践練習の組合せで進められた。特に、コミュニケーション能力の習得のためには、主体的に学習者が参加する活動が重要であり、ロールプレイなどの練習機会を増やすことが鍵となる。そのため、患者役を演じる外国人（模擬患者）の存在が必要不可欠であるが、これまで医学、工学、応用生物科学研究科などの大学院留学生から協力を得て、医師-患者コミュニケーションの練習機会を確保してきた。平成27～29年度に参加した模擬患者は、東アジアまたは東南アジアの出身者が多く英語を母語とはしないが、彼らの英語能力は海外実習希望者の準備教育にとって十分なレベルである（表3a, b参照）。

学部・研究科	人数
工学	21
応用生物科学	10
連合農学	6
医学	2
地域科学	2
連合獣医学	1
その他（センター等）	2
その他（学外）	2
計	46

表3a：英語模擬患者（学部・研究科別）

出身国・地域	人数
インドネシア	24
中国	6
バングラデシュ	5
ミャンマー	4
アメリカ	1
エクアドル	1
韓国	1
スウェーデン	1
ペルー	1
香港	1
マレーシア	1

表3b：英語模擬患者（出身国・地域別）

模擬患者の役割は、問診では、場面設定や患者背景などを記述したシナリオの内容に沿って患者を演じること、身体診察では医師役の学生の指示を聞きながら、診察に応じる演技が求められる。また、演技後は「患者として学生の医師役がどう見えたか」「英語表現はわかりやすかったか」「態度は適切だったか」など簡単なフィードバックをすることも重要な役割である。

異文化交流機会の提供

「医療英語ワークショップ」では、外国人模擬患者と学生が小グループに分かれて一緒に昼食することとし、異文化交流を促している。特に、本学の国際交流イベント「English Lounge」のようにあるテーマでディスカッションしながら、留学生は「日本」のこと、医学科生は留学生の「国」のことなど、文化や社会について英語でお互いに学べるのが期待できる。さらに、気軽な雰囲気英語を話すことで、英会話に苦手意識の持つ学生にとっては、その抵抗を下げるができる。

英語による客観的臨床能力試験 (English OSCE)

準備教育プログラムの最後で学生の英語コミュニケーション能力と診療能力を評価するため、English OSCE を実施している (表 2)。この実技試験に合格することが海外臨床実習に参加するための一つの条件となる。平成 28 年度の受験者は「医療英語ワークショップ」の出席率 8 割を満たした 5 年生 (計 23 名) であった。模擬患者には、岐阜大学留学生 16 名から協力を得た。また、評価は、MEDC 教員 3 名に加え医学部教員 3 名と学外教員 2 名の計 8 名で行なった。試験は 3 ステーションあり、学生は各々のステーションで症例シナリオや場面設定が提示されたあと、12 分間の実技を行なう。2 ステーションでは模擬患者に対する問診と身体診察、また、1 ステーションは実習初日の指導医との面談という場面設定での英語コミュニケーションに取り組んだ。各ステーション終了後に 5 分間のフィードバックセッションを設け、学生の実技に対する評価者と模擬患者とのフィードバックを受けることで、学生のふりかえりを促すようにした。

4. 準備教育での学生と留学生の学び

海外臨床実習準備教育プログラムを通して、医学生は医療現場での「英語表現」や「英語の多様性」「診療アプローチの違い」など多くの学びを得たという声があった。さらに、英語での実践練習を繰り返すことで、自信を得て海外実習へのモチベーションを上げる学生もいた。下記に、学生の声の抜粋を紹介する。

医学生

【英語表現】「きょうはどうされましたか」という、普通に日本語で聞けば何ともないことが、英語で言ったら何を聞けばいいんだみたいな、まず最初、初めてやったときはそれすらも全然よく分からなくて。どんどん学習していくうちに、こうやって言い換えるんだとか、医学用語とかもこうやって簡単に、この検査とかも普通に専門用語とか使わなくても全然説明できるんだとか、そういういろんな発見があってすごい楽しかったです。

【診療アプローチ】身体所見の取り方で、やっぱり日本と違う部分も結構あったなっていうのは自分は思ってた、そういうところを学べたのはすごい良かったなと思います。

【自信】そもそも英語で人としゃべる機会がこのワークショップ以外なくて、最初すごい緊張してたんですけど、だんだん体験って大事だなと思って。SPさんと、うまくは全然いかないんですけど、こんな感じかなっていうのがちょっとずつ分かってきて、自信っていうか、やってやるぞっていうやる気が出ました。

【英語の多様性】SPさんの中には、クリアな英語じゃなくて、こっちが分かりにくいような英語をしゃべる人もいたんですけど、逆に言えばそれも訓練の一つかなと思って。海外行けばいろんな国籍の人がいて、ネイティブじゃない人もいっぱいいると思うので、だから、それも踏まえての練習だと思って。

一方、模擬患者として参加した留学生は、日本人学生との交流機会をもつことで学びを得たり、楽しさを感じたりする声が聞かれた。また、医学生のために貢献したいという気持ちでワークショップに臨む留学生が多くいた。つまり、留学生にとっても本ワークショップに何らかの意義を見出しており、「良い経験」を得る場として捉えられている。下記に、留学生の声の抜粋（原文ママ）を紹介する。

留学生

【日本人（医）学生との交流】

- I love to communicate with people and got to know each other.
- I thought I can get a lot of experiences from here, and meet so many people.
- Workshop offered me chances to talk in English with Japanese students.
- I found it interesting in having conversation with medical students.
- I got new Japanese friends in here, thank you.

【コミュニケーション】

- I have got more confident to talk with other and improve my English.
- I improved my communication skills.
- I could learn how important communication is.
- I got new knowledge, and also improved my communication skills.

【教育への貢献】

- If I have any chances to volunteer for medical education or research, I would like to contribute.
- As I'm going to be a veterinarian, I'm very familiar with medical terms and communicating with patients. So, I can somehow contribute to education for medical students.

5. 教育内容の充実化にむけて

MEDC 企画の「海外臨床実習準備教育プログラム」は、診療現場での英語による実践の練習機会を提供し、海外臨床実習参加にむけた基礎固めを目的としている。「参加学生の声」にあるように、準備教育での学習経験が海外実習での深い学びを促したといえる。特に、模擬患者とのロールプレイは、英語での診察への自信を持たせる機会となる (Ashida et al., 2015)。さらに、本プログラムでは、医学英語やコミュニケーションの学習の場に加え、受け入れ先の選定や申請書類の作成等の事務手続きにおいても学生の主体性を重視している。こうした準備期間を経て渡航した本学医学科の学生は、海外臨床実習を通して、臨床スキル、医師 - 患者関係、臨床倫理、文化リテラシー、ヘルスケアシステムなどの知識、スキル、態度が習得できたことを帰国後に報告した。これは、先行研究の知見と一致する結果となった (Nishigori et al., 2009)。

本準備教育プログラムの模擬患者に関しては、医学科だけでなく他研究科の外国人大学院生から協力を得ることができた。英語を母語としない模擬患者が多いため、ネイティブスピーカーの英語を学ぶという点では、そのような背景の外国人を募集することが今後の課題となる。一方で、グローバリゼーションが進み移民やビジネス、観光などで人の行き来が活発になるにつれ、様々な国の人々の英語に触れる必要性も高い。実際に、学生からは様々な人種の患者や医療者、また留学生と会話する場面が多かったという帰国後の報告もあり、本プログラムでは、最低限の英語力は必要であるが、英語圏に限らず様々な国の方々から協力を得ることが望ましいと考える。

本来、模擬患者は「教育者側」の役割を担うが、彼らの多くは日本人学生との交流が持てることをモチベーションの一つとしており、より対等な関係で参加していた。つまり、日本人学生との交流を通じて、模擬患者である外国人大学院生も何らかの学びを得たい、交友関係を広げたいといった要望をもっている。特に、本プログラムでは、**language exchange** のような交流機会を昼食時に設け、お互いの国の観光地、祭り、スポーツ、正月の過ごし方といったテーマを英語で話し合う取組みも行なった。こうした観点からは、本プログラムを学部・学科を越えた国際教育の機会として捉えることもできるだろう。

海外実習への準備教育をさらに充実させるためには、これまでの医療英語や英語による診療スキルの練習に加え、「社会言語・異文化コミュニケーション」「文化・海外事情」「海外生活での危機管理」など海外実習、留学に関わる学習内容を総合的に取り上げることも重要である。しかし、MEDC 教員だけでは、マンパワーも専門領域も限られるため、他学部・他センターなどとの協働により大学全体で留学希望者をサポートできるような系統的準備教育が必要かもしれない。また、海外臨床実習の申請のためには **personal statement** や **CV**, **cover letter** 等の書類準備や受け入れ機関によっては面談 (選考試験) を課すところもあり、「特定の目的のための英語教育 (English for Specific Purposes)」の充実化が求

められるため、英語教育の専門家からの助言も必要となる (Ding, 2007)。

さらに、今後は学生の海外臨床実習中のサポート体制も検討しなければいけない。Malau-Audi (2011) は、オーストラリアの医学部留学生は、言語の壁やコミュニケーション、文化の差、経済的負担など、多くの問題を抱えながら教育を受けていることを明らかにした。送出し機関として、4週間（もしくは8週間）という短い期間ではあるが、実習中に学生がどのような問題を抱え、その問題をどのように対処していったのかを把握する必要がある。これまで MEDC は、海外実習中に学生の安否確認を兼ねて試験的に LINE でのコミュニケーションを図ってきたが、総合的学習支援ツールとしての e ポートフォリオの導入が有用である。e ポートフォリオは、インターネット環境が整えばどこでもアクセスできるため、送出し機関が海外実習中の学生の学習経験を把握できるだけでなく、教員からのフィードバックを得ることで、学生自身の学習の省察を促すことも可能になる。

医学科の海外臨床実習希望者は、毎年増えており、国際的志向性の高い医学生が卒業し研修医、医療者として従事している。今後は、海外臨床実習の経験者が医療人としてどのような道を歩むのか、その長期的な教育効果を検証することも重要である。また、大学教育という観点から、他研究科の外国人大学院生が模擬患者として活躍する準備教育プログラムが学内の国際化を推進する一助となれば幸いである。

【参考文献】

- 経済産業省 (2014) 「病院のための外国人患者の受入参考書」 URL:
http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/26fy_sankousyo_all.pdf (平成 29 年 6 月 1 日確認)。
- 日本政府観光局 (2017) 「統計データ (訪日外国人・出国日本人)」 URL:
http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/ (平成 29 年 6 月 1 日確認)。
- 広島大学高等教育研究開発センター (編) (2015) 「高等教育とグローバル化～グローバル人材養成の課題・可能性～」『高等教育研究叢書』第 130 号。
- 法務省 (2017) 「平成 27 年末現在における在留外国人数について (確定値)」 URL:
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html (平成 29 年 5 月 31 日確認)。
- Ashida R, Kuramoto CD, Fukuda K. (2015) Training clinical students through interviews with English-speaking simulated patients and giving case presentations to clinicians. *Journal of Medical English Education*, 14 (3); 117-121.
- Ding, H. (2007) Genre analysis of personal statements: Analysis of moves in application essays to medical and dental schools. *English for Specific Purposes*, 26 (3); 368-392.
- Malau-Aduli, B. S. (2011) Exploring the experiences and coping strategies of

international medical students. *BMC Medical Education*, 11; 40.

Nishigori, H., Otani, T., Plint, S., Uchino, M., & Ban, N. (2009) I came, I saw, I reflected: A qualitative study into learning outcomes of international electives for Japanese and British medical students. *Medical Teacher*, 31 (5); e196-e201.